

「学際」教育の再興と身体イメージ

廣瀬浩司

人文・文化学群／比較文化学類

人文社会科学研究科現代文化・公共政策専攻准教授

(ひろせ こうじ／フランス思想・現象学)

「学際」の遺産のもとで

ふとした縁で本学で教えさせていただくことになったのが1996年のことであるから、ほぼ10年にわたって、筑波大学で授業をしてきたことになる。前任校では助手だったので、ここに来てから始めて本格的に専門の授業を担当することになった。

それまではほぼ研究者としての活動に追われていた私が担当することになったのが、比較文化学類・思想分野の比較・現代文化分野の授業である。どうやら要求されているのは「学際」的な授業であるらしい。この言葉は当時でもやや古くさく思われたものの、今でもそれに代わる名前が確立しているわけではないし、学生当時も学際的と呼ばれる学部・大学院に所属していたので、要求されているものは、ほんやりとわかっているはずであった。

私の学生時代には、学際と言えば「記号論」ないし「ポスト構造主義」などと呼ばれた学問であり、かなり難解で、かつ少しばかり韜晦的なもので、マルクス主義的な闘

争からは距離をとりながら、「権力」に「批判的」であろうという学生たちには、一種麻薬的な効果を与えていたものだ。中心になっていたのが文学者たちであったこともあり、「批評」とよばれる自称「クリティカル」な言説をもって、映画、現代演劇、現代アート、サブカルチャー、ダンス、写真そして政治をエレガントに論じることが、出版界を支配していたものである。そしてそれを背後から支えていたのが、フランス現代思想というものであった。

私自身はそうした動きに近すぎるところにいたので、逆にすぐさま距離を取り、それ以前の実存主義と言われた時代の哲学の研究に向かったのであるが、いずれにせよ授業では、こうした80年代以降の文化研究と、その思想的背景をなす哲学とをわかりやすく切り売りすればなんとかなるのであると、安易に考えていたものである。

文化研究の廃墟

だが事態はそう簡単ではなかった。こう

したみずからの研究の過程を辿り直すことでは、とうてい今の学生の要求には答えられないとすぐさま気づかれたからである。かつていくつかの雑誌をかかえていた映画批評はすっかりすたれてしまったし、現代アートをめぐる言説は、高度に理論化しすぎて、一般化が困難になってしまった。かつて記号論者たちは、プロレスなどをエレガントに論じて物議をかもしつつ衝撃を与えたが、そうしたサブカルチャー研究もその政治力をすっかり失い、とりわけ日本的な土壌にあっては、現状肯定とかぎりなく近いが、「終わらなき日常」をやっとのことでやりすごすのに有益な、甘い言葉をつぶやくだけになってしまったようだ。学生たちが消費している文化現象が、80年代とあまりにも変貌してしまったから、なおさらである。記号論を「メディア論」に置き換えたところで、本質は変わらない。

80年代に全盛であったフランス思想の遺産を食いつぶしながら授業をしていくことは、今の学生のリアルな感覚とは別のところで、「文化研究」と呼ばれる廃墟を築きあげていくことと等価であるかのように思えたものである。

そうしたなかで、どのように学生に届く言葉を発すればよいのか、この10年はその模索過程であったと言えるだろう。やがて比較・現代文化の授業だけではなく、概論

科目や大学院の授業をも担当することになったから、自分の言葉をかぎりなく一般化しつつ、なおかつ研究者をも育成しなければならぬという困難な課題に立ち向かうことになってしまった。毎年の授業内容決定の時期には、たいへんな悩みをかえ続ける事態におちいったのである。

言語主義の詐術

思えば前述の「批評」が際限なく紡ぎ出されていたのは、80年代の言語主義の前提のうえであった。私たちの経験はつねに言語的に構造化されており、文化的創造はその組み合わせを変えたり、「ずれ」を挿入したりして、斜めな態度でそうした構造化をやりすごしていくことが、課題だと考えられていたのである。もちろんデリダをはじめとするラディカルな哲学者たちは、そうした構造化そのものの無根拠性を問い、そうした無根拠さをなんとか今ここにおいて立ち現させるために際限なく努力してきたわけであるが、「文化研究」はいわばその努力に甘え、対象を変えてみたり、すでにある言葉やテキストにある種の気の利いた「視点」を投げかけたりするだけで、言葉を紡ぎ続けてきたのであろう。

なんのことはない、文化を言語的に構築されたものとみなしたうえで、そうしたみずから作り上げた構築物を変奏し、ずらし

てみせていただいただけであるから、これは一種の手法である。君たちは言語的なものに絡め取られている、だがその背後には「現実」はない、現実があるとしたら、それは君たちを死と狂気に導くような、恐ろしいと同時に親しげな何かである。注意せよ、というわけであるから、これは一種の脅迫でもあった。それが現在では「マルチ・メディア」を通じて、私的空間と公的空間を横断して、亡霊のごとくさまよっているというわけだ。だがこのような擬似精神分析的な発言は、文化現象をいわば上から見下ろした啓蒙的な発言に思え、今の学生のリアルな感触とはどこか決定的にずれているのではないかと思えたものだ。

身体イメージという出来事

このような毎年の模索や、卒業論文指導における学生との格闘の果てに、自分の研究の課題としても浮上してきたのが、イメージと身体をめぐる問いである。なんのことはない、私の本来の専門である現象学的身体論の再興ということであろうか。

たしかに私の研究仲間の中には、現在の認知科学の成果を利用して、現象学の身体論を論じ直す動きがみられ、可能ならば授業でも紹介してきた。問題になるのは「こころ」と呼ばれるメカニズムの身体論的説明であり、身体と環境との関係であり、ま

た「言語以前」の場面で「気づかれる」微細なメカニズムの解明である。そうした研究を通して、私たちの行為を日々つかさどっている「身体図式」の成立、その崩壊、それが「こころ」に与える影響、そしてそこからの回復の可能性の模索が企てられているのである。

ただしこうした研究は高度に専門的であり、理論的な操作や理系的な知識を要求するので、基本的に「批評」的な比較文化学類において教育していくのはなかなか難しい。したがって私が教育の中心に置いているのは、やはり芸術をめぐる問いである。といっても、芸術作品を記号とみなし、それを解釈する手つきの巧みさを競うことは、もはやできない。過去の権威ある作品だけを相手にしていれば、それも可能かもしれない。だがそれだけでは、今作られつつある作品、これから作られるであろう作品の創造性に迫ることはできないだろう。

こうした視点のもと、教育においても私が問題にし続けていたのは、身体的な行為と結びついたかたちの「イメージ」である。それはいつも出来事として生み出されるがゆえに、東の間現れるだけであり、意識させるのはひじょうに難しい。

だが芸術とはこのイメージをなんとか固定化して、見えるようにする試みではなかろうか。その場合私たちの身体はどのよう

に動いているのだろうか。身体といっても、たんなる物理的な身体ではなく、たえず動きながら、イメージによって自己を統御し、また、統御不可能な事態におちいったときには、新たなイメージを立ち現せることを迫られるような、そんな身体である。

このような身体イメージを、授業ではセザンヌの絵画やジャコメッティの彫刻、映画的なイメージ、そして私たちの分析の視線を攪乱し、反対に私たちを貫き返すような、写真のイメージの分析にさぐってきた。このようなイメージはまた、病的な身体像の解明にも有益であろう。

おわりに

たいへん幸福なことに、私が担当する人文社会科学研究科・現代文化・公共政策専攻には、こうした関心に「身体的」に反応してくれる学生がとぎれることなく入学してくてくれている。

もちろんこれは私の力ではまったくなく、むしろ、しめしあわせたわけでもないのに、ふしぎと同じような関心を持っている先輩や同僚の先生方のおかげであり、そして何よりも、文化研究の現状に飽きたらず、みずから問題を提起しようとしている学生たちの潜在能力のゆえである。こうした背景のもとでのみ、私も身体的イメージという「出来事」に安心して身を委ねることができ

るのだ。

さらに嬉しい驚きもある。文化系の研究では、従来語学が基本とされ、原書を読み込む力が重視されてきた。もちろん私自身も学部時代にはなによりもフランス書を読むことを基本にしてきた。だがそうした教育法が、大きな困難を抱えているのも事実である。だが嬉しいことに、大学院に進学してくれるような学生は、入学後すぐさま何よりも語学が重要であることを理解し、必死に勉強して、何人かは試験を突破して留学先に旅立っている。まさか、出来事としてのイメージの身体性は、語学教育にも有益なのだ、などと言うつもりはさらさらないが、頼もしいかぎりではある。